

カリキュラム上からもあると私は考える。そこで教育系大学にまず限定して少し触れてみたい。

### 地学科における天文スタッフ

当大学5分校のうち、岩見沢・札幌・釧路の3分校では現在のところ天文スタッフはいない。カリキュラム上の点からはどの分校も天文関係を充実したいし、学生の中からもそれを望む声が強いと聞いている。さる分校ではかつて学生自治会の要求として「天文教官を！」という声が挙がったと聞いた。このような事情がありながらも天文スタッフをとることが出来ないのは、一つには人事の複雑さがあり二つには地学科教官定員が余りにも少ないということがある。前者はイワズモガナであろう。後者の場合、例えば岩見沢分校では地学教官定員は2である。このことは理科の他の学科でもいえることだが、特にいくつかの学問分野を含んでいる地学の場合、カリキュラムの充実を考えるならば問題が痛感される。天文スタッフがいないといっても、不十分ではあっても天文関係の非常勤講師としての活用が考えられる。それも出来ないときはそれなりの天文教育が工夫され考えられているのであろうか。かつて私が冷や汗をかきながら地質学と名をうって講義をした状況（5年前、1年間の定割不補充に関して経験）を考えていただければ結果は明らかであろう。

教育大学及び教育系学部でみるかぎり、天文スタッフの多くは地学科系統に属するものが殆どである。その大学及び学部で構成される日本教大協の理科部門の名簿（昭和61年4月現在）でみると、スタッフについて次のような結果が得られる。但し、ここでは分校とよばれるものを一つの学部として含めた。

#### 教育大学及び教育系学部（国立）のスタッフ構成

大学・学部数	59	天文スタッフを有する数	16 (25%)
地学科系スタッフ数	199	天文スタッフ数	23 (12%)
（北教大の場合）	14	“	2 (14%)

但し、ここでは地学科系外に属する天文スタッフは含まれていない。

この結果から、地学科関係スタッフの定員数がもともと絶対的に少ないということを知るとしても、その地学科の中での天文スタッフ数があまりにも少ないことが指摘される。教育系大学では2/3以上の大学・学部で天文スタッフをもっていないし、地学科系全体のなかでの天文スタッフの割合はきわめて少ない（12%）。当大学の場合も率では14%と少ない。これらの大学では地学科系スタッフが2～3人というところも相当あり、ひどいところでは1人というところもある。このような2～

3人の地学科スタッフ数しかもたない大学の場合、どのような専門分野のスタッフで構成するかはきわめて難しい。スタッフの新採用の場合でも、自分達の研究活動のみを指標におくならば同じ分野の者を迎えたほうが良いことになろう。ただし天文の場合、3人のうち複数で占めるなんてことはどうみても許される雰囲気にはない。ともかく自分達のエゴを相当発揮したとしても、その場合当然カリキュラムのうえでの犠牲を強いられたり、何よりも学生に強いることになる。しかしながらこのような人事の場合、研究活動上からやむを得ずということばかりでなく、自分達の出身大学・専攻分野というものに固執してすすめられることも現実には多くみられるようだ。天文の場合、そのように固執できる（エゴが発揮できる）ところがもともと少ないのである。小・中・高校の地学関係分野で天文の占める内容が昔に比べてかなり多くなってきていることは今までにも報告されてきた。仮にその天文の占める割合を30%（高校の理科1ではこんなものである）とし、その比率で天文スタッフをかんがえたとすれば、前述の教育大及び教育系学部における天文スタッフは約60人が必要となる。現在よりも実に37人の天文スタッフが要求されることになる。これが実現されればOD問題への少なからぬ貢献にもなるだろう。そして均衡ある理科教育を進めることにもなるし、何よりも天文関係者にとっては天文教育の成果を大きく全国的に広げていくことになる。このように考えることは決して天文関係者のエゴではないと思うのだが。

### お知らせ

#### 東京天文台一般公開

東京天文台の一般公開（本会后援）が10月31日（土）に行われます。台内諸施設の公開は午後2時から午後4時30分まで、月面観望は午後7時30分まで行われます。天候の都合で観望終了時刻を繰上げることもありえます。なお雨天の際は中止となります。

当日参観を目的の自動車の構内乗り入れは禁止です。幼児には必ず保護者の同伴をお願いします。

☆ ☆ ☆

☆ ☆